



project concept

様々な歴史が積み重なる広島市中心部には、それぞれの時代を象徴するモニュメントや都市構造がのこる。しかし、平和都市としてのイメージが強く存在する広島は、まちの他の様々な魅力や歴史の深さについて考えたり、思いを馳せたりすることに不自由である。本プロジェクトでは原爆投下というまちの悲慘な歴史を、まちの大きな歴史の一部に捉え直し、広島で暮らす人や、訪れる人の歴史観を開放する。そうすることで、都市での経験そのものがより多くの広島の歴史やアイデンティティと繋がりをもち始め、まちは、その歴史や土地から生まれる様々な豊かさを謳歌できる都市空間へと変わっていく。

project site：歴史が積み重なる広島市中心部

南を瀬戸内海に面した広島は、太田川を主流とする三角州によって、東西北を丘陵地に取り囲まれた市街地を形成している。かつて城下町として栄えた広島はその後近代化に伴い軍都としての役割を担い、1945年の原爆投下の日を迎える。今日まで力強く復興してきた広島の都市空間には、そうした各時代を象徴するモニュメントや都市構造が残り、その歴史の重層性を体现している。



広島市航空写真（赤：歴史公園）

広島城築城 — 戦国時代



軍都広島 — 戦時中



原爆投下 — 1945年



高度経済成長 — 昭和中期



site history：広島がまちに残すモニュメントと都市構造



background：覆い隠される歴史の連続性

広島の子どもたちは原爆の悲慘さと平和の尊さを平和記念公園への課外学習などを通して学ぶ。また、丹下健三が与えた記念資料館—慰霊碑—原爆ドームを結ぶ軸線は崇高化され、人々にまちの見方を強いている。こうした平和都市としての役割をもった広島の都市空間は、そこで育つ子どもたちや、初めてまちを訪れる人たちにとって、まちの他の様々な魅力や歴史の深さについて考えたり思いを馳せたりすることに不自由である。



歴史の見方を強いる都市空間

objective：広島の見方を開放する

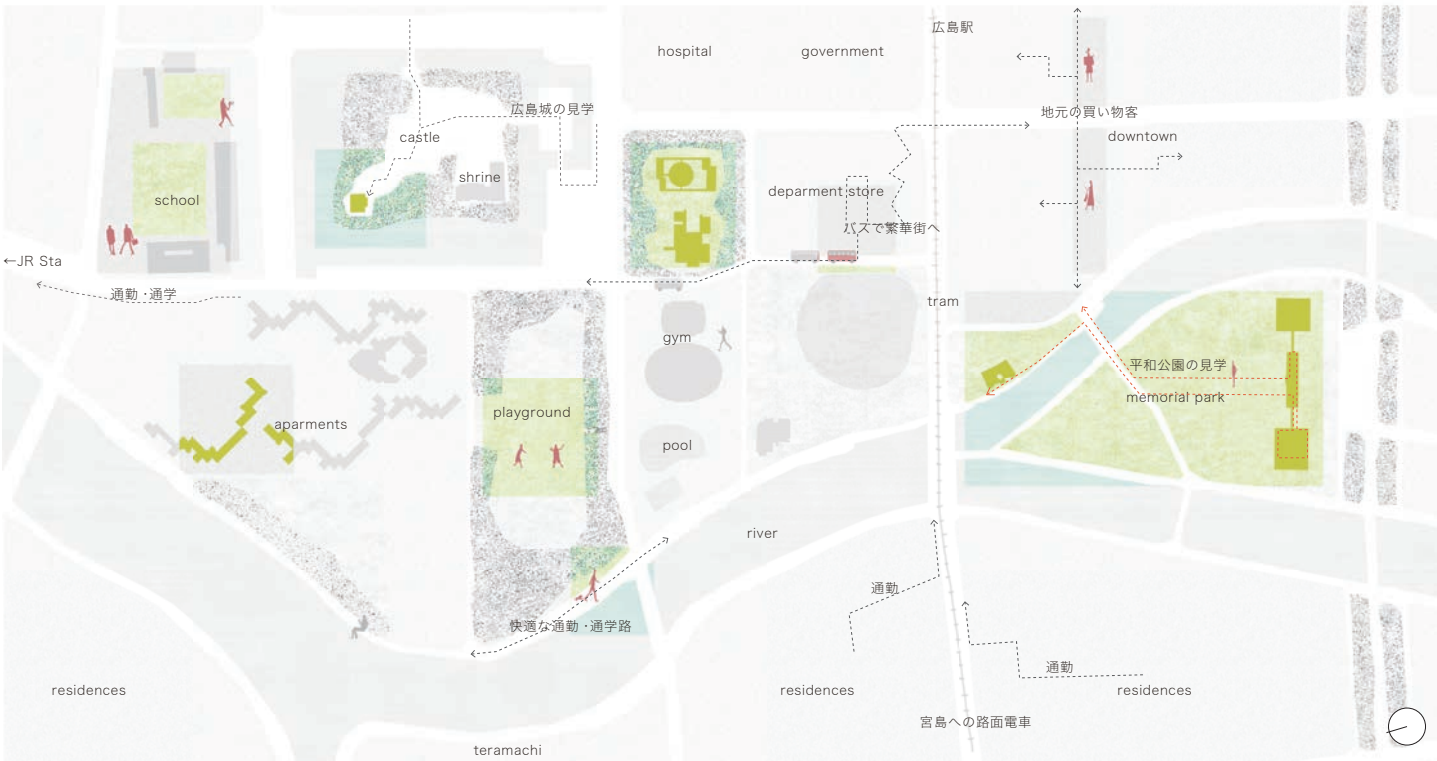
平和都市としてのイメージは、それまでの広島の歴史や、その歴史の重層性を体现した都市空間を覆い隠している。そこで、本プロジェクトでは原爆投下という歴史を、まちの歴史の一部に位置づけ直すことで、広島の歴史観を開放する。そうすることで、都市での経験そのものが、より多くの広島の歴史やアイデンティティと繋がりをもち始め、まちは、その歴史や土地から生まれる様々な豊かさを享受・謳歌できる都市空間へと変わっていくと考える。



これからのこどもたちに新たな広島の歴史観を育む

The Image of the City : 断片的な広島イメージ

広島市中心部をみてみると街区によってそこが担う機能がはっきりと別れている。もともと城内であった地区は近代化に伴い軍用地となり、現在は官庁建築や公共施設が立ち並ぶエリアとなっている。路面電車を挟んで向かい側に旧西国街道である本通り商店街からなる繁華街がつづく。そうしたまちのイメージの背景には原爆投下や城下町であった歴史がつくる都市構造がある。



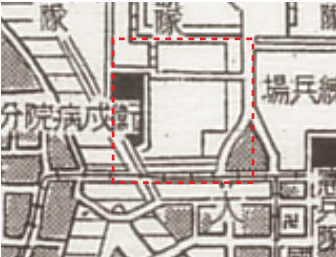
断片的な広島イメージ

site : 旧広島市民球場跡地

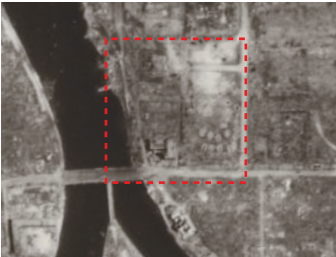
現在空き地となっている市民球場跡地は広島各時代において、それぞれの時代を象徴するような都市機能や役割があった。



武家屋敷が並ぶ（～江戸）



軍事機能（戦時中）



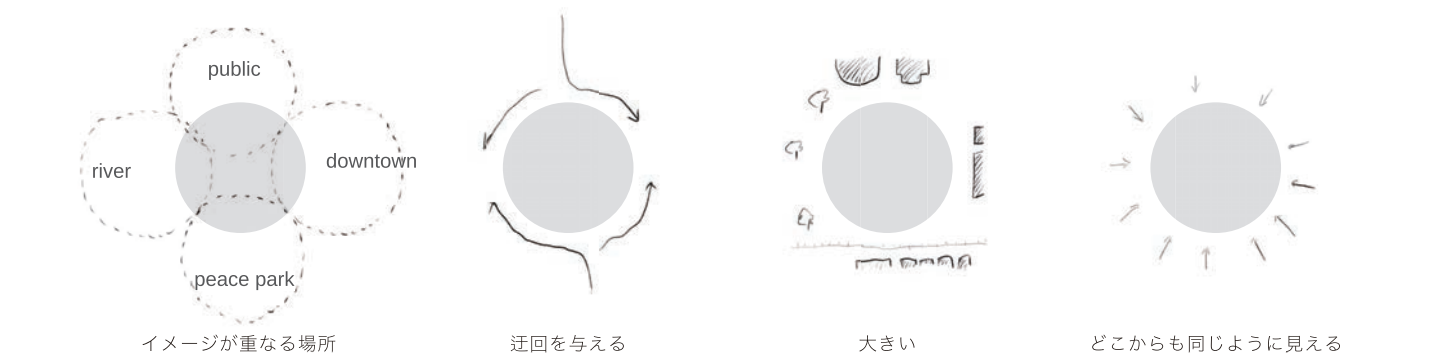
原爆スラム（戦後）



市民球場（1957）

site diagram : 場所のイメージの構造化

この場所や市民球場跡地が持っているイメージを構造化し、建築に応用する。そこから生まれる建築は”都市と建築の間のような建築”になり、都市的創成物としてまちにストラクチャを与えるものとなる。



The New Image of the City : 広島イメージに加わりながらそれぞれの関係性をつくる

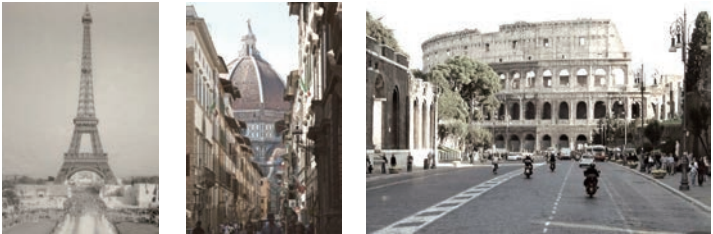
下に示す考え方をもとに作られる建築はこれからの広島歴史に新たに加わるような強い都市的構造とプログラムを有するものとする。都市での経験の共通項となる建築は、次第に広島イメージに加わりながら、街の人たちに馴染み、関係性をつくるようになる。軸線をのみこむほどの大きさの建築は、街での経験のあらゆる瞬間に垣間見え、まちでの経験を意識的にもつなげていく。



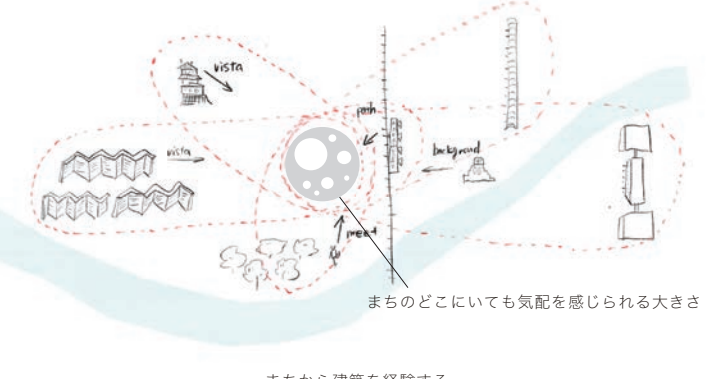
広島イメージに加わる建築が現れる

idea : まちでの断片的な経験に共通項を与える

広島での経験は断片的でそれぞれが不連続である。そこで、かつての市民球場がそうであったように、街のどこからでも気配が感じられ、街での経験の延長線にあるような建築をつくる。そうすることで、今、目の前で起きているそれぞれの経験が一つのまちでの出来事として捉えられるのではないかと考える。ローマのコロセウムや、街の隙間から見えたドゥオモのように、機能やプログラムを超越した唯物的な建築の存在（ランドマーク）がまちを経験する人々に、まち全体を捉える視点を与える。

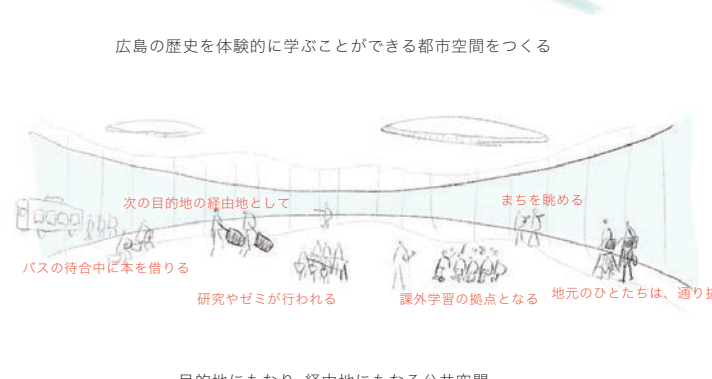
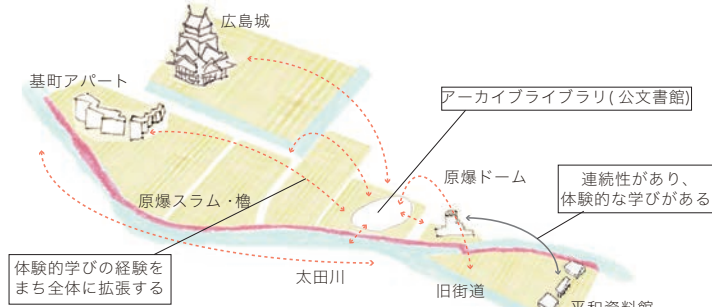


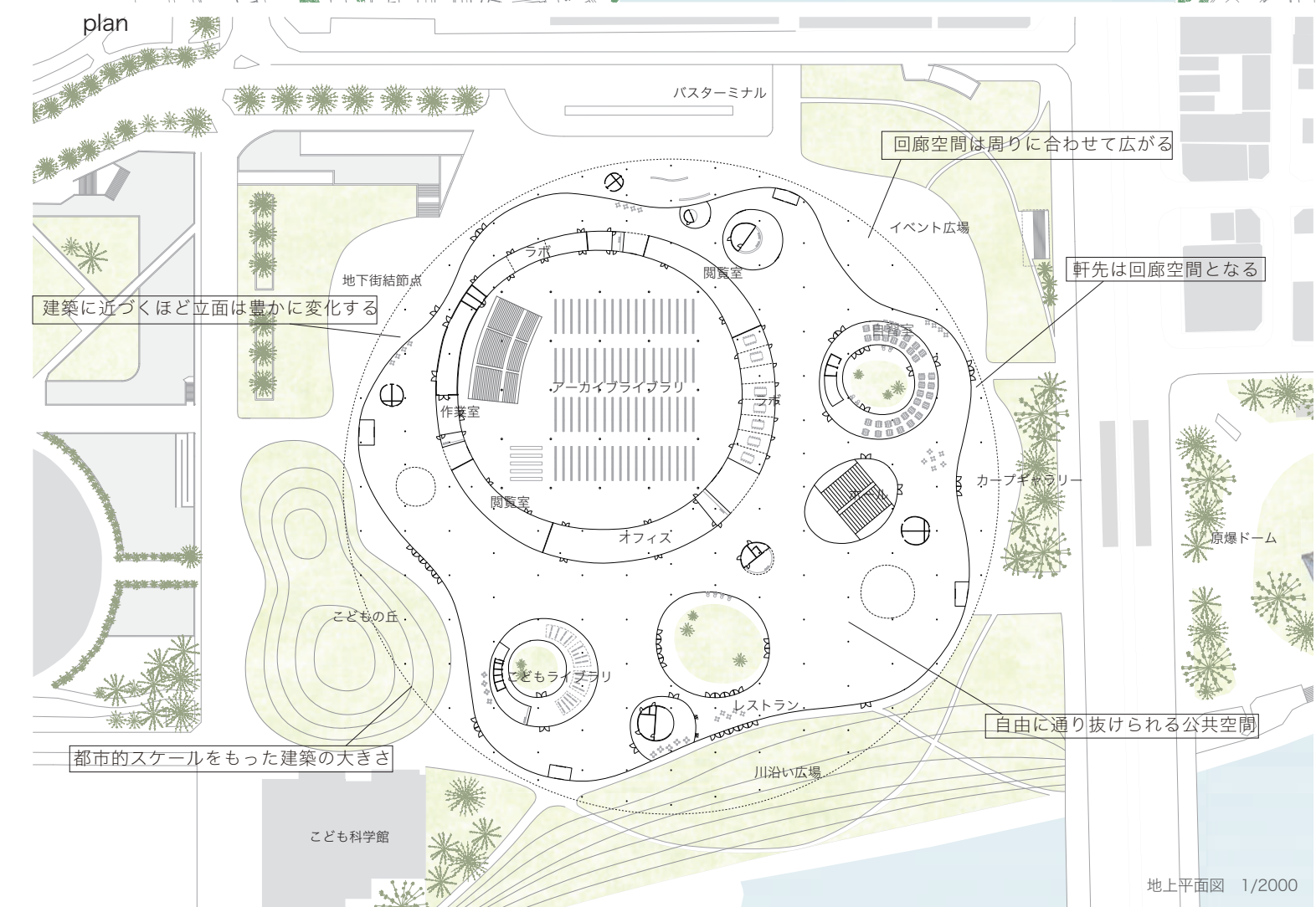
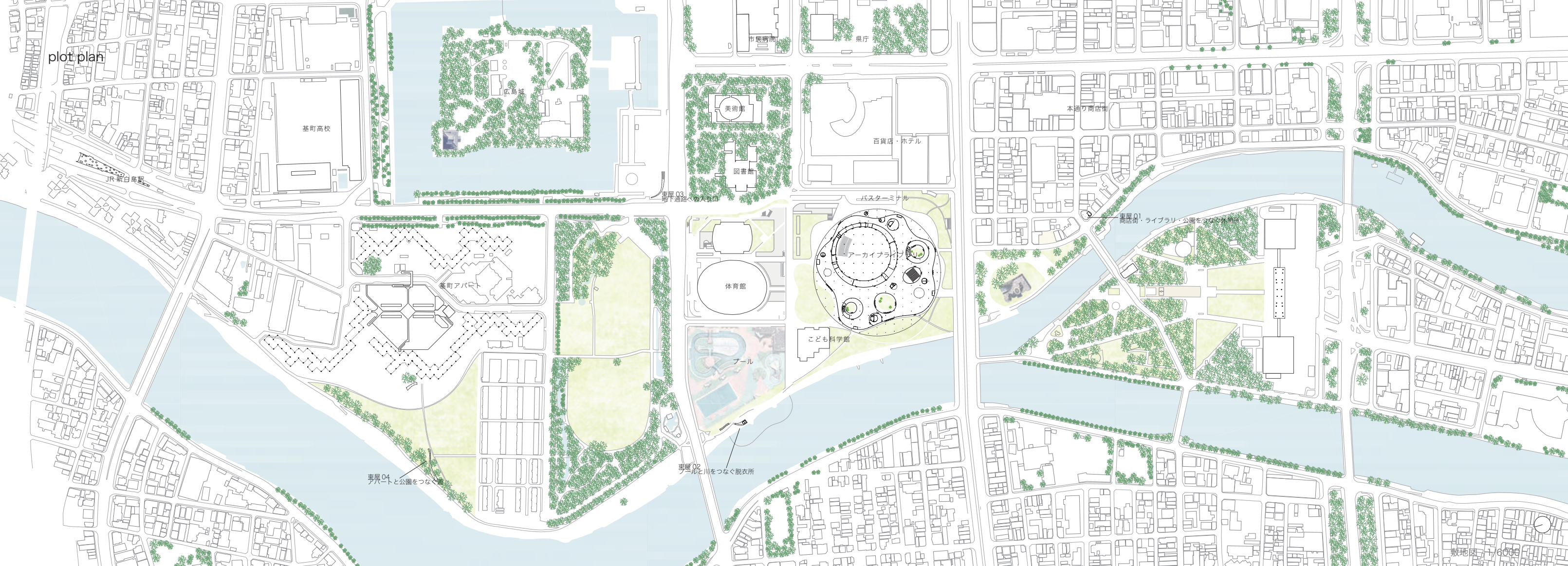
まちのイメージを与える建築



program : まちをアーカイブするライブラリ(公文書館)

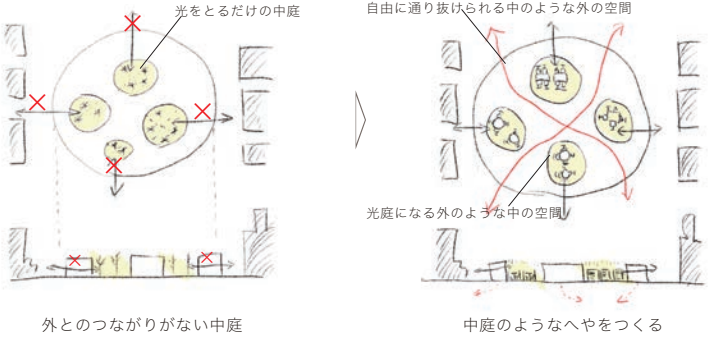
広島というまちには原爆投下によって一度そのほとんどを焼失した。それは本や写真だけでなく建物など、焼き尽くせるものすべてである。今一度、この場所に歴史の断片を集めることで、広島の大きな歴史をアーカイブするライブラリをつくる。また、まちをアーカイブするライブラリが、その歴史の重層性を体現する都市空間と共にあることで、まち全体が体験的学びの場へとかわっていく。





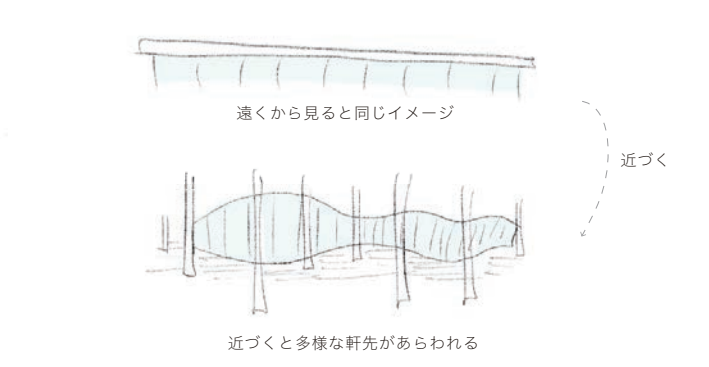
Section : 外のような中、中のような外

大きなワンルームを作る際、採光の問題が生じる。しかし、中庭を作るとすると外（まち）と中庭が分断されてしまい中庭はただの光庭でしかなくなる。そこで中庭を部屋のようにすることで、人が明るい環境で活動を展開できる外のような中と、逆におちついて人が自由に通り抜けられる雰囲気をもった、中のような外をつくる。



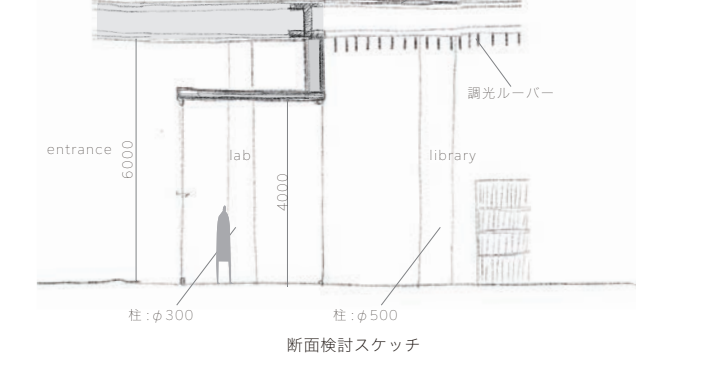
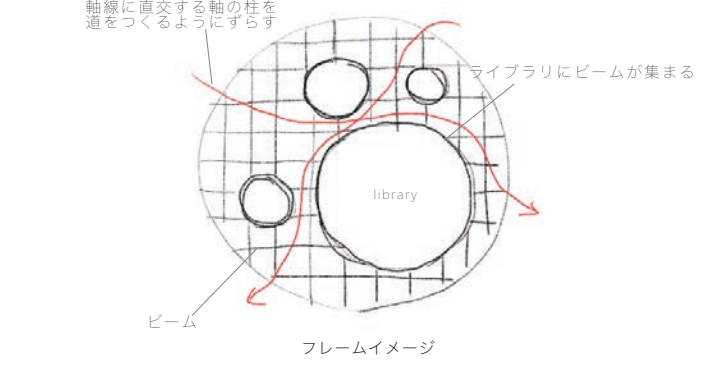
Elevation : 近づくことで変化する、正面のない立面

円形平面による正面を持たない立面は、まちから建築を経験する際、すなわち遠くから見ると、同じようなイメージを与える。しかし徐々に建築に近づいて行くと周辺の豊かさに呼応して軒先空間が形を変える。それにより360°にわたって広島豊かさの元に人が集まる立面が生まれる。



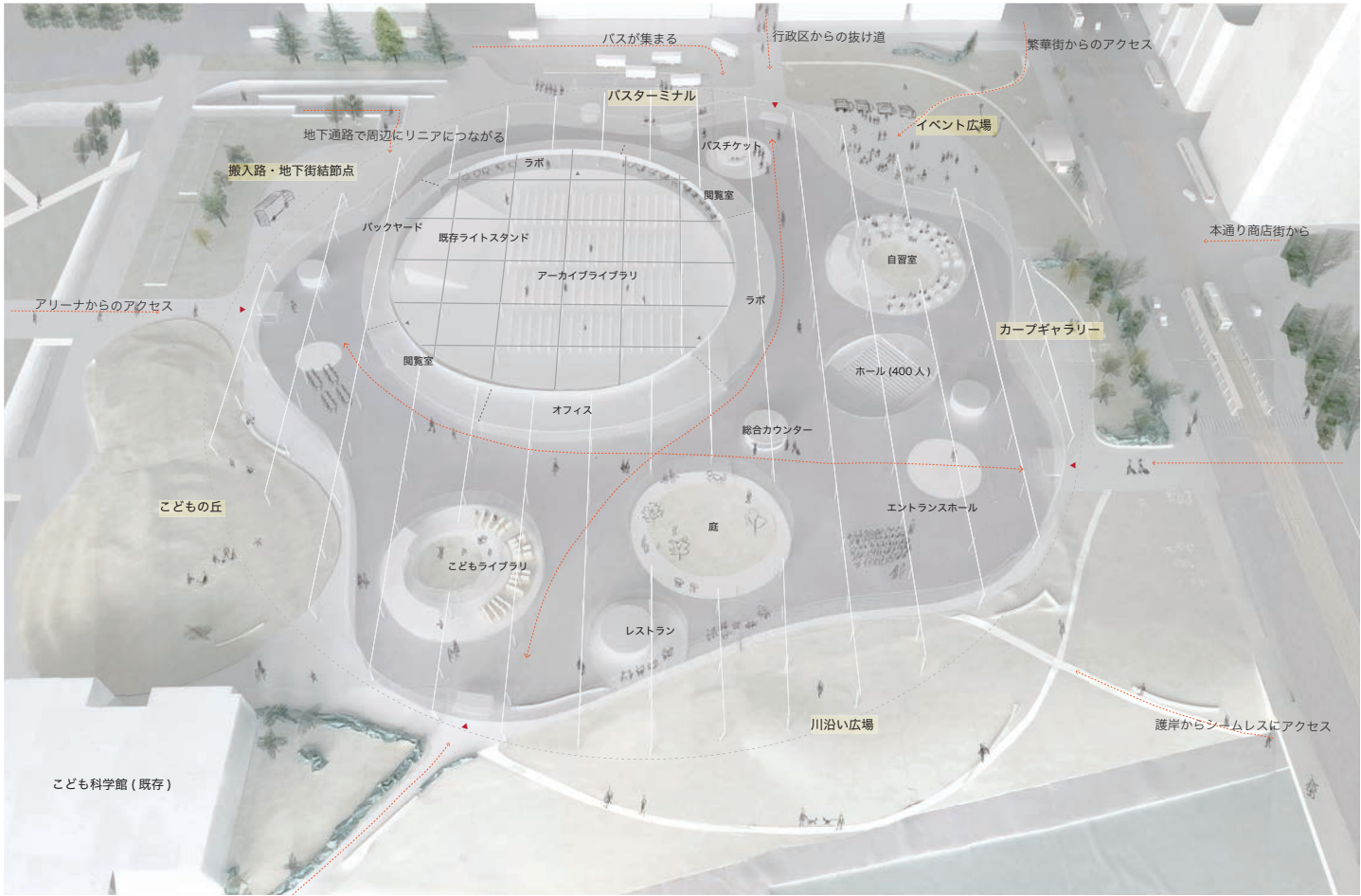
Structure : ライブラリが建築を支える

直径約200Mの大屋根は林のように立つ柱によって支えられる。大きな屋根の水平力には既存のライトスタンド（旧市民球場跡）を取り囲むようにやや偏心した位置にある大きなライブラリ、中庭のようにつくこともライブラリ、自習室が抵抗する。



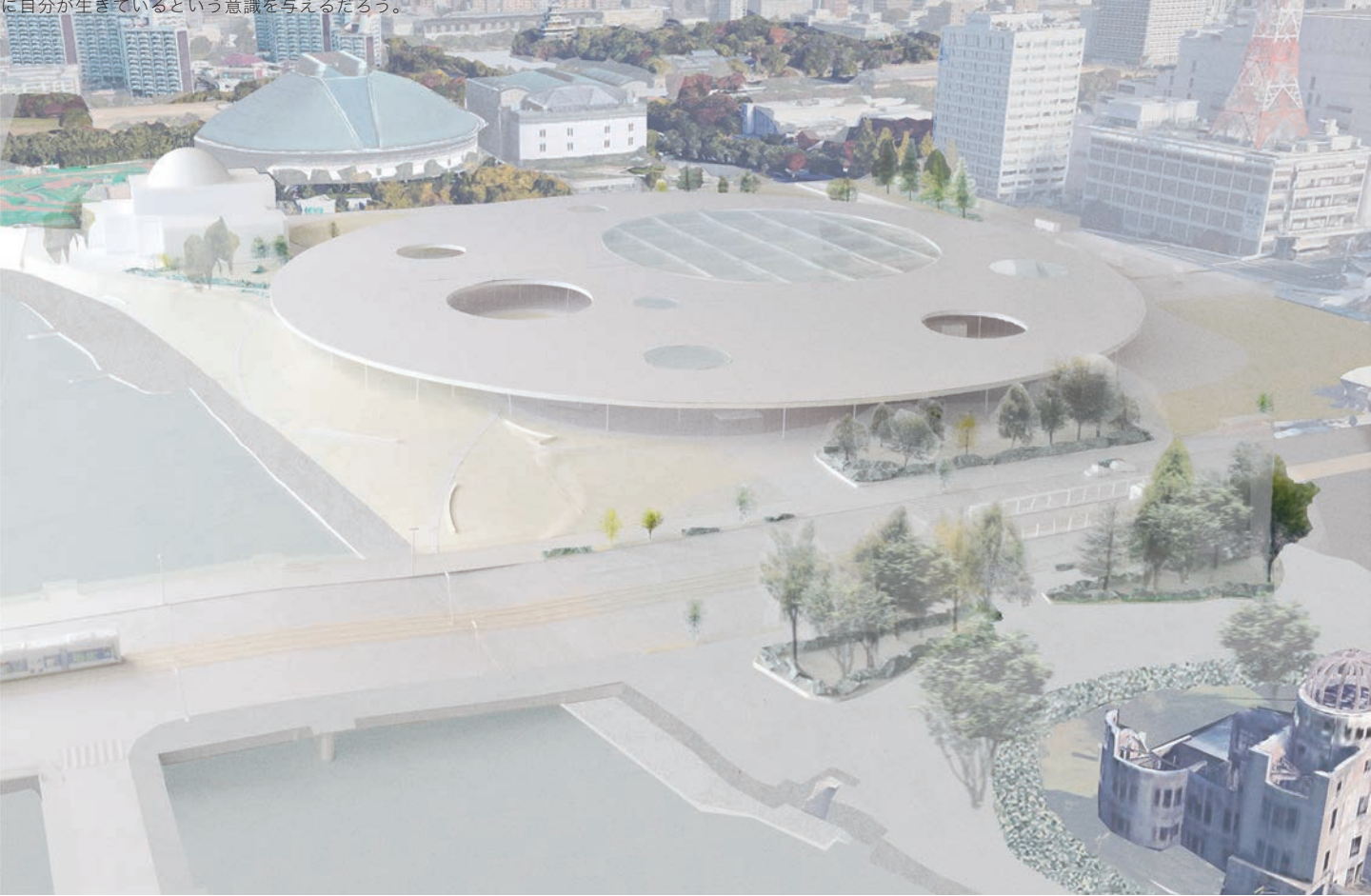
Plan Theme : 巨大さによってまちとの多様な関係性をつくる

都市的なスケールを持つ建築は、ただ大きいことだけで周囲との関係性を生むことができる。建物の全周が、周囲とのたくさんの豊かな関係性を持ち、ワンルームの内部空間に集まることで、このまちのアイデンティティやエネルギーが集まってくるような力強い場所となる。

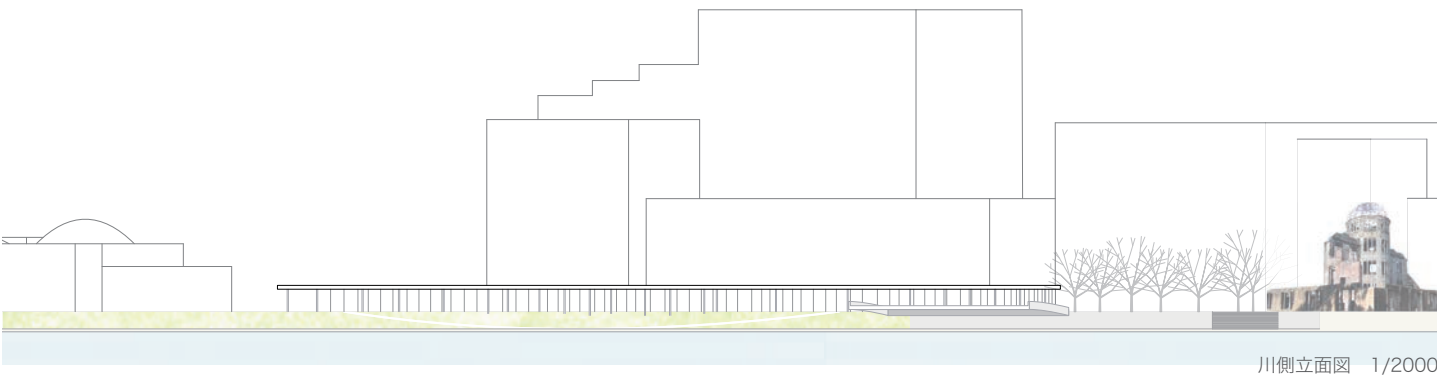
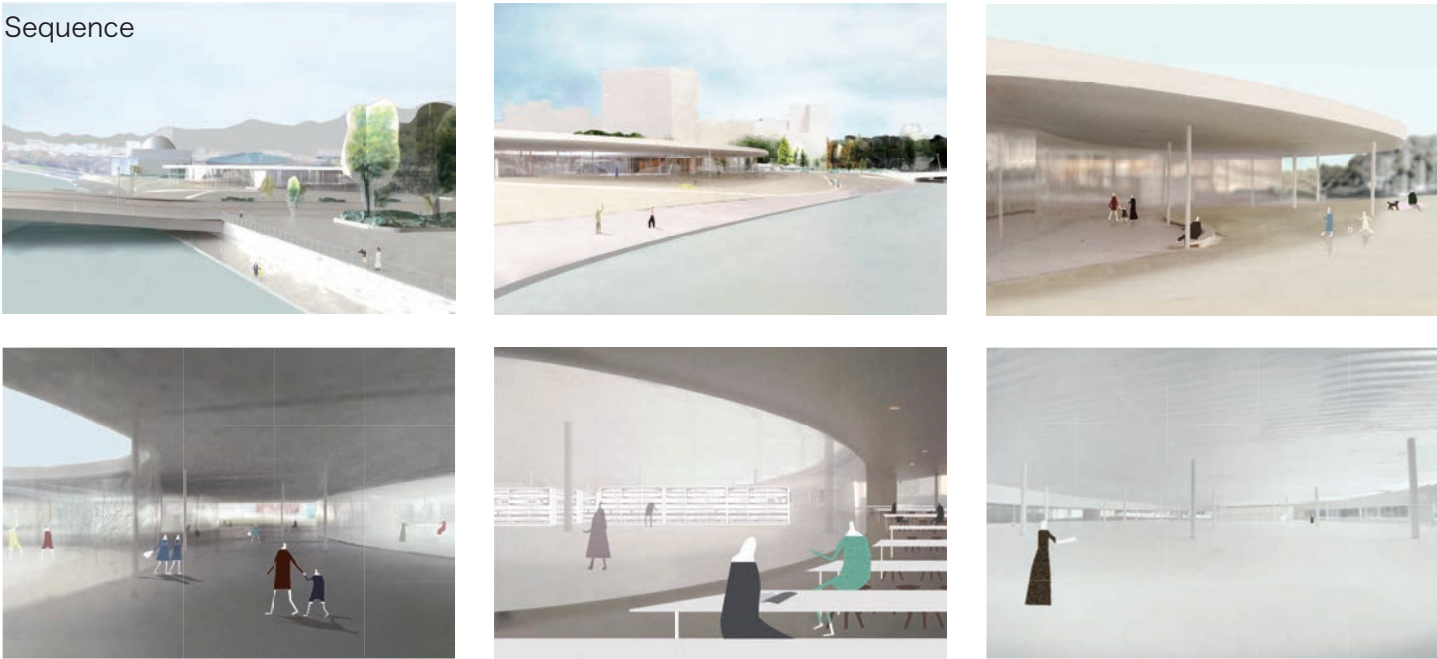


歴史を共にする新たな広島風景

学校帰りの高校生はここで本を読みながら自学に励み、川沿いで友人と将来について語り合い、商店街でおつかいを頼まれ、路面電車で揺られ家路につく。こうした些細な出来事は広島を生きる人たちに、まちでの経験そのものが、広島という土地や歴史によって育まれた豊かさであることを教え、改めてこのまちの歴史の中に自分が生きているという意識を与えるだろう。



Sequence



川側立面図 1/2000